
京都の四季

尾束 珠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

京都の四季

【Nコード】

N4682G

【作者名】

尾束 珠

【あらすじ】

発表済みの4つの短編を纏めたものです。京都に住む私（安奈）の、18歳から27歳までの恋愛物語です。古都の春夏秋冬の移ろいの中で、その恋愛は形を変え流れて行く。私は何を感じ、何を求めて行くの？そして、その結末は？

プロローグ（前書き）

これは、先に短編で出した”京都の春物語””京都の夏物語”京都の秋物語””京都の冬物語”を纏めた物です。ご理解をお願いします。

何かが、心に届いたら嬉しく思います。

プロローグ

・・・まる、たけ、えびす、に、おし、おいけ、あね、さん、ろっかく、たこ、にしき・・・

北から順に、京の通りを覚える数え歌の一部です。

碁盤の目に張り巡らされた京都の通りは、1200年の歴史と共に、現在も、かつての平安京の面影を残して息づいています。

京都に観光で訪れる人々は、京都の四季に触れて何を思うのでしょうか。

京都は単なる文化財の宝庫として、また遺産都市として捉えられているのでしょうか。

私は、この街で生まれ、この街で育ち、この街で生きて行きます。日本の他の都市と同じように、少し違った固有の文化と慣習とともに生きて行きます。

私の名前は”杉本安奈”スキモト アンナ。

普通の、今時の高校生です。

少し違うのは、京都と言う古い街で過ごしている事くらいです。と言って古風なわけでもなく、舞妓さんになるわけでもないです。

ごく普通の、私の恋は、京都の四季と歳月を通じて色を塗り替えて行きます。

それは、無邪気な青春の色であったり、悲しい別離の色であったりするわけです。

私は、この京都の四季の中で、京都に生まれた女性として強く生きて行きたいと思います。

そんな、私の10年間の恋の物語を掻い摘んで、お話しする事にします。

第1章 春

早春の京都は、三月の暖かく穏やかな陽射しの中で霞んでいた。私は四条大橋の舗道の欄干にもたれながら、霞む比叡山や東山の山並みを眺めていた。

京都の街を覆う霞のような空は、中国大陆から風に乗って飛来する、”黄砂”のことを言うのだろうか、私は空を眺めて思った。

スキモト アンナ

”杉本安奈” 18歳。高校を卒業したばかりの私の名前である。

四月から京都市内にある、女子短大に進学が決まっていた。

私は京都市内の西の端にある、西京区と言う所に住んでいた。

今日は母に頼まれて、東山にある祖母の家に預けてある母の着物を取りに行く途中だった。

四条河原町までアズキ色の私鉄に乗り、四条大橋を渡って右に下がれば、

古い京町家の祖母の家がある。

私は、四条大橋の上から見える鴨川の流れに春の訪れを感じ、暫く立ち止まって、辺りの景色を眺めていた。

ひっきりなしに目の舗道を通る観光客の言葉に、京都は観光都市であることを再認識した。

そろそろ祖母の家に行こうと、鴨川から目を離して振り返った先に、半年前から付き合っているカレシの”亮太”^{リョウタ}の姿を偶然に発見した。彼は、高校のクラスメイトだったが、夏休みの夏期講習が切っ掛けで親しくなり、

2学期に入った頃に、彼から告白され付き合っている。

彼は進学をせず、4月から京都市内の建設会社に就職することに

なっていた。

それまでは、春休みのバイトで自分のスケジュールを埋めている筈だった。

しかし、明日はバイトが無いので映画を見に行こうと、私は彼から誘われていた。

今日はバイトの筈なのに、彼はどうして此处を歩いているのか不思議に思った。

バイトが休みになったのなら、私に電話を掛けてくればいいのにも思った。

彼は私と反対側の舗道を、八坂神社のほうに向かって歩いていた。

私は彼を偶然の発見をした嬉しさに、彼をビックリさせようと声をかける事にした。

私は、四条大橋の東詰まで歩いて、北側に横断歩道を渡り、川端通で歩行者信号を待っている彼に追いついていた。

彼は、ジーパンに白いブルズンを着て、ポケットに両手を入れて信号を待っていた。

私は後から驚かせてやろう彼に近づき、私の手を彼の肩に置こうとした瞬間、動作を止めた。

何故なら、彼の隣で信号待ちをしている若い女性に、急に彼が話し掛けたからだった。

私は予期していない彼の行動に、凍りつくような衝撃を受けて立ち尽くした。

私が、後ろに居る事を知らない彼は、馴れ馴れしい言葉で彼女に言った。

「しかし、キョウコと会うのん、チョット久しぶりやなあ」

話しかけられた女性は、亮太に向かって答えた。

「こつちも、あの事でバタバタしてて、電話でけへんだしね」

彼女も、亮太に向かって親しげな言葉で話していた。

彼女は20歳くらいに見えた。

派手な茶色に染めた髪はウェーブがかかり、肩から20cmくらいの長さだった。

白いスーツはタイトのミニスカートで、ハイヒールを履いた彼女は化粧も濃く見えた。

私は二人が何処に向かって歩いているのか、どんな関係なのか解らなかった。

でも、二人の後を距離を取りながら着いていった。

彼女は亮太の身内の人間なのかとも思ったが、彼に姉や妹が居ることは聞いていない。

彼の両親は15年前に離婚しており、彼は母親と二人で住んでいる筈だった。

私は祖母の家に行くことを忘れたかのように、二人の後を探偵のようになら追跡し始めた。

私の頭の中は、彼女と彼が親密な男女関係だっらどうしようかと、不安は大きくなった。

逆に彼女が、彼の身内で従妹とかだったら、私の行動はお笑い種になるとも思った。

しかし、目の前を歩く亮太を秘かに尾行することを、私は中止する事は出来なかった。

二人は、四条通を歩き、花見小路を越えて八坂神社の石段を登り始めた。

観光客に混じって10m位後を歩く私に、亮太は全く気づいていなかった。

石段を後から上る私は、前に行く白いスーツ姿の女性の短いスカートと、スラリと伸びたスタイルの良い長い脚が目に入った。

その時、私の頭のどこかで亮太が言った言葉が思い出された。

亮太は、派手で大人っぽい、年上のOLのような女性が好みだと言っていたことだ。

私の心の中は湧き上がる不安と、彼への不信感で一杯になりそうだった。

此処まで来て追跡中止もできないし、今更声をかけるのもタイミングが悪いと思った。

二人は八坂神社に仲良くお参りしてから、近くのベンチに並んで座って話をしていた。

私は神社の建物の陰に隠れて、後ろのほうから二人を見ていた。

二人は笑いながら顔を見つめ合い、恋人同士で話をしているかのようだった。

亮太はあの女性と付き合っているのだと、私の心の中で誰かが囁いた。

私は、二人の見える建物の陰から、亮太の携帯に思い切って電話を掛けた。

私が彼に抱いている不安を解消するには、これしかないと思った。

彼は、私の質問に対して納得できる答えを返してくれると、心のどこかで期待していた。

私の不安は取り越し苦労であることを、彼の声ではっきり確かめたかった。

私の電話に、彼はポケットから携帯を出し、着信者を見て電話に出た。

「もしもし・・・」

私は建物の裏から、私の声が聞こえない程度の小さな声で喋った。

「もしもし・・・安奈。亮太は今、バイト中やったっけ？」

彼は答えた。

「うん。バイト中やで。今日も残業で遅くなりそうやわ。何やった？」

私は一瞬、自分の心が潰れそうになるのを堪えて、彼に続けた。

「亮太が明日、映画見に行こうって言うてたやん。何時ごろから行くのん？」

彼は、数秒黙ってから言った。

「ごめん。明日アカンようになったんやん。バイトがどうしても休まれへんねん」

私は呆然として、彼に言った。

「そうなん？バイト休めへんねやったら、仕方ないやんね」

「せやけど亮太。あんたのバイトって工場ちゃうん？メチャ静かやん、まわりが」

彼は、誤魔化す様に笑って言った。

「ああ、丁度、今な、休憩時間やねん。機械止まってるしな・・・」

私は、大きな絶望感を感じながら電話を握り締め、言った。

「解った。ほんなら、また電話するし・・・」

私は、慌てて電話を切った。

目の前が真っ暗になったような気がした同時に、悲しくて目の前がぼやけていった。

私は、この場所から一秒でも早く逃げ出したくなって、祖母の家に行くことを決めた。

彼女と彼は、ベンチを立つて、私の居る建物の傍を二人で通り過ぎて行った。

建物の脇を通り過ぎるときに、二人の会話の断片が私に聞こえてきた。

私にとって、その会話は、心が押しつぶされるような痛みに感じた。私の隠れる建物の横を通り過ぎながら、二人は笑いながら会話をしていた。

どんなに言い訳をしても、二人は仲の良いカップルにしか見えなかった。

彼女が言った。

「あんだ、よくそんな嘘が付けるなあ。どう見ても、此処は工場ちやうで」

「その子、私の存在は知らんねんやろ？」

彼は言った。

「知ってるわけないやん。いつかは話はするつもりやけどな」

私は、そんな二人の会話に耳を塞ぎたい気持になった。

二人は仲良く肩を寄せながら、八坂神社の隣にある円山公園の方に歩いて行った。

私は、足早に八坂神社を離れて、祖母の家を目指して四条通を西に歩いた。

すれ違う観光客を避けるように歩き、私は祖母の家の古い格子戸を

開けた。

祖母は、私の母の母で、昔は祇園の御茶屋の女将をしていたと聞いている。

今は、他人に譲ってひっそりと、この家で余生を送っている。

母が父と結婚した後、独りになった祖母は生け花や踊りや着付け等を教えていたが、

七十歳を過ぎた今は、それも辞めて読書と観劇だけを趣味に過ごしているようだった。

その祖母の昔ながらの、はんなりとした京言葉は、

私にとって時には、異国の言葉に聞こえるような響きだった。

祖母は涙で目を濡らし、玄関から入って来た孫娘の顔を見て問いた
だした。

「安奈はん。どないしやりましたん？ 泣いたはるのと違うんど
すか？」

私は手で涙を拭いて、笑いながら祖母に言った。

「ちやうねん。黄砂が目に入ってん。涙止まらへんわ」

祖母は、自分の座っている座敷机に座るよう、私に言った。

「安奈はん。どうでも宜しおすけど、ちょっと、ここにお座りやす」

私は座布団を引いて座り、祖母の顔を見て言った。

「お母さんから言われて、着物取りに来たんやけど、何処にあるの
ん？」

祖母は私を睨むように言った。

「そんなことは、後からでも、かましなへん。何であんさんは、泣いたはりますのん？」

私は祖母が私のことを心配してくれているのは充分解ったが、亮太のことを説明するのは億劫だった。

そして、早く祖母から母の着物を貰って帰り、自分の部屋に籠ってしまいたかった。

私は、よく磨かれた座敷の机に目を落としながら、黙って俯いていた。

祖母が痺れを切らして言った。

「あんさんみたいに気丈な子が、泣かはるなんて、尋常な事やおへんさかいにな」

「お祖母ちゃんが聞いてあげるさかいに、言うてみなはれ。安奈はん」

私は、祖母の優しい気遣いと、凜とした口調に涙が止まらなくなっ

た。堪えようとする気持に反して、涙は流れ、しゃくりあげる始末だった。

私は、その悲しい感情が少し落ち着いたとき、祖母に全てを話した。祖母は、私の泣いている理由を黙って最後まで聞いてくれた。

祖母は私の泣いている理由を聞き終わって、優しい口調で言った。

「亮太はん・・・どしたかいな？ 前に、わての家に遊びに来てはったボンどすやろ？」

「亮太はんは、そんなタチの悪いボンやおへんと、わては思いますけどな」

「あのボンの目は、安奈はんを裏切るような目は、したはらへんと

思いまっせ」

「わても、男はんを見る目は有りまっさかい、安奈はんは、心配せんで宜しおす」

祖母は、そう立て続けに私に言っつて、母の着物を風呂敷に包んで私に渡した。

そして、電車で帰ったらシワになったり、崩れたりするのでタクシ―で帰るように言っつた。

祖母は箆笥の引き出しから、タクシー代と言っつて一万円を渡した。いらな―いと言っつて返しても、受け取る祖母でな―いことを承知して―いた私は、

祖母に礼を言っつてポケットにお金を仕舞い込んだ。

祖母に、亮太の話をしたことで不思議と気持は楽になっつたが、心の中では、やはり、穏やかな気持にはなれなかつた。

タクシーに乗っつている間、色んな言葉や色んな光景が頭の中を過ぎっつていっつた。

五条通を西に向かう私の目に、桂川の向こうの西山に傾いた夕陽が眩しく輝いていた。

私は、家に帰ると自分の部屋に閉じこもり夕食も摂らなかつた。

母は私を心配して部屋に来てくれたが、体調が悪い旨の返事をしてベッドに横になっつていた。

翌日から、食事には顔を出したが食欲は出なかつた。

家族との会話も殆どしなくなり、友人との買い物約束や、食事の誘いも断つた。

両親や友人は私を心配してくれたが、やり切れない私の気持は沈んだままだつた。

私の頭の中には”キョウコ”という文字と、”亮太”という文字が

グルグル回っていた。

私は鬱病って、こんな感じなのかなと客観的に感じながら、陰鬱な日々を過ごした。

その間に、亮太からのメールも電話もないことから、

私と亮太の関係は、こんな形で何となく終わるのだろうと感じていた。

4月に入って初めての土曜の夜、亮太から電話があった。

私は、その電話が嬉しいのか悲しいのかわからない、複雑な気持ちで受信した。

亮太は、やけに明るく就職先のことや仕事の内容を喋り続けた。

私は、どこか遠くから聞こえてくる亮太の声に、耳を傾けながら涙が流れるのに気づいた。

亮太は、そんな私の気配に気づいて問いかけた。

「安奈、どないしたん？何かあったんか？」

私は鼻を嚙りながら答えた。

「うーうん。別に・・・」

亮太は、明るく弾けるような声で私に言った。

「安奈。久しぶりやし、映画に行かへん？世間は春爛漫やで。明日は日曜やし行こ！」

亮太の余りにも明るく上機嫌の声が、私の落ち込んでいる心に針を刺していた。

亮太は”キョウコ”という女性と付き合いながら、私を誘っている

のかと腹立たしくなった。

私の胸は、そんな亮太の身勝手に不埒な言葉に、悲しさと苛立ちで潰れてしまいそうだった。

私の、どうすることも出来ない感情の高ぶりは、遂に亮太に爆発した。

私は亮太に言った。

「そんなに映画に行きたかったら、私と違くて”キョウコ”さん誘えばええやん！」

亮太は突然の私の言葉に声をなくした。

「ええ？」

私は続けて亮太に言った。

「”キョウコ”さんと居るほうが、亮太は楽しそうやし、私のことは、もうほっといて！」

亮太は混乱しながらも私に言った。

「安奈、あのな、自分勘違いしてるって。ちゃうねん、”キョウコ”はな、ちゃうねん」

私の感情は亮太の言い訳を聞きながら最高潮に達し、泣きながら叫んだ。

「私は、二人が八坂さんでデートしてんの知ってるねんで！言い訳は、もうええから！」

亮太は、私の叫びを電話で聞きながら笑い始め、そして、私に言った。

「安奈、その事なあ。安奈に解る様に説明するし、今から出て来てや、俺もバイクで行くし」

私は、亮太の言い訳を聞くことを了解し、家の近くの公園に行くことを告げた。

これで最後になるのだったら、直接会って別れるほうが気持の踏ん切りが着くと思った。

私はコンビニに雑誌を買いに行くと母に伝えて家を出た。

春の暖かい夜風が顔を撫でて、私の悲しむ心を嘲笑っているように思えた。

公園に着くと、亮太は既にバイクで到着し、街灯の下のベンチに座っていた。

私は彼の座っているベンチに距離を開けて座り、無言で俯いた。

彼は、何から話したらいいのか迷って居るようだった。

思い切ったように、彼は言葉を吐き出し始め、次のような複雑な話をした。

・・・15年前、彼の両親は離婚した。

母は京都に残り、父は大阪に移った。

離婚後の話し合いで、3歳の亮太は母に引き取られた。

しかし、亮太には7歳の姉が居り”キョウコ”と言う名前だった。

ところが、15年後の今年、亮太の父が病死して、22歳になった

”キョウコ”は、

母の元に戻って暮らすことになったと言う。

そして、今年の三月、私が亮太と”キョウコ”を見た日は、

”キョウコ”が母と亮太に、今後の生活を相談する為に京都に来ていた時だった。

母に相談する前に亮太に相談し、その意思決定を母に伝える為の二人の話し合いだった。

二人で話し合った後、母も”キヨウコ”と暮らすことを賛成し、翌日から”キヨウコ”の引越しや、市役所の手続きなどで、亮太は走り回ったという。

だから私には悪いと思ったが、その騒動が落ち着くまで連絡が出来なかったと言った。

私は、長い時間を掛けて亮太からの説明を聞きながら、

彼の家族の事情を納得し、勘違いをしていた自分の行動を恥じていた。

そして、祖母が私に言った言葉を思い出して、祖母の見る目は確かだと感心した。

”あのボンの目は、安奈はんを裏切るような目は、したはらへんと思いまっせ・・・”

祖母の凜とした言葉が、私の心の中に蘇り、私の曇った心は晴れていった。

翌日の日曜日、私はウキウキした気持ちを振りまいて、亮太とのデートに向かった。

今までの沈鬱な私を見ていた両親は、娘の天真爛漫な姿を見て、あつけに取られていた。

家を出て春の陽射しを浴びている私は、自然にニコニコと笑っているのが解った。

私って、案外単純な性格なのかなと考えたが、私の笑みは体中から放たれていた。

体中が自由になったようで、手も足も心も春の陽を浴びて踊りだすのが解った。

亮太と映画を見て昼食を取り、ゲームセンターで遊び、コーヒース

ヨップで夕方まで寛いだ。

夜の帳が降りた頃、二人は円山公園を歩いていた。

多くの屋台が立ち並び、夜桜見物に繰り出した人ごみの中で、
ライトアップされた”枝垂れ桜”は、春の夜空一杯に見事に咲き誇
っていた。

私の心は、昨日までの湿った孤独感、疎外感、不信感をどこかに吹
き飛ばして、

手を繋いだ亮太の手の温もりと、私を包み込む彼の優しさを感じて
華やかに彩られた。

円山公園を、ほんのりと照らす提灯を見ながら、二人で歩く私の口
元から歌が流れた。

”月は朧に東山・・・”

そんな祇園小唄という古い歌が、小さいとき祖母から習った私の記
憶から蘇った。

京都の、東山や鴨川の風景を歌う昭和初期の歌は、この風景にぴっ
たりだと私は思った。

そして、私は亮太と繋いだ手が、いつまでも離れないようにと心の
中でお祈りした。

枝から舞い落ちた桜の花が一枚、優雅な舞を見せながら亮太の肩に
留まった。

私は、その花弁を彼の肩から彼に気づかれないように、そっと掌に
取って、

自分のポケットの中に、大切に仕舞い込んだ。

私は、その桜の花弁が、いつかポケット一杯の綺麗な花を咲かすよ
うな予感がした。

私は、並んで歩く彼の横顔を見つめながら、幸せな気持で微笑んで
いた。

第2章 夏

蒸し暑い京都の夏は、盆地特有の気候を訪れる人々に実感させる。京都の路地や石畳の小路は、打ち水がされ風鈴の音色が、涼しげな音を立てていた。

私は、祇園祭の宵山に行く為に、一年ぶりに浴衣に袖を通して帯を締めた。

髪を後に結び上げ、白いうなじを自分の鏡で見ながら、”結構イケテルやん”と笑った。

スキモト アンナ
”杉本安奈” 22歳。それが、私の名前である。

通っていた京都の短大を卒業し、京都市内の商社に就職して3年目の夏だった。

今日は、高校時代から付き合ってるカレシの”亮太”リョウタと祇園祭りの、宵山に繰り出すために浴衣を着て、彼の仕事が終わるのを待っていた。

祇園祭は、実際には7月1日から7月31日までの長い期間の祭りである。

そして、7月17日は山鉾が市内を巡行し、多くの他府県からの観光客が訪れる。

宵山は巡行の前日で、コンチキチンと鐘を鳴らす鉾や山車が、夜の京都を演出する。

毎年、私と亮太は宵山の山鉾を巡り、八坂神社にお参りするのが通例だった。

私は5時に会社を出て家に帰り、シャワーを浴びて浴衣に着替えて彼の電話を待った。

午後7時過ぎに亮太から電話があり、今から着替えて迎えに行くと

言った。

母は、気合を入れて化粧をした浴衣姿の娘を、微笑みながら見ていたが、

今帰ってきた父は、不機嫌そうな目でチラッと私を見てリビングに消えた。

父親は年頃の娘を、カレシに盗られるのが淋しく、複雑な心境なんだと私は心の中で笑った。

母親は母親で毎年成長していく娘を見ながら、自分の若いころを思い出しているようだった。

暫くして、車のクラクションが鳴り、私はリビングの父に”行って来る”と言って家を出た。

父は”おう”と言ったまま、新聞から目を離さなかった。

私は、そんな可愛いオジサンになった父を見て、つい微笑んでしまった。

彼と私は、西大路四条の交差点の近くにある、彼の会社の駐車場に車を止めた。

市内中心部には車が入れないことは解っているので、西院の駅から電車に乗った。

四条烏丸の駅まで電車で行き、観光客や市民でごった返す四条通に歩いて行った。

京都の夏の風物詩である祇園祭は、例年の賑わいの中で”コンチキチン”と音を立てていた。

亮太も紺色に白地の柄をあしらった浴衣を着て、団扇を腰に挿していた。

私の右手を引っ張って、人ごみの中を歩いてくれていた。

疫病や災いを治めるために始まった祭りは、現代の京都を訪れる人や市民に、エキゾチックな感覚と、日本古来の伝統の響きを、形を変えて伝えているようだった。

彼は四条通の和装の小物店で、私に”かんざし”を買ってくれた。蝶が羽を広げ棒の先に止まっているような、可愛らしい物だった。私は、それを私の髪に挿してもらい、お店の鏡で見て嬉しそうに笑っていた。

彼も、それが似合うと言って、選んだ人のセンスが良いと誇らしげに自分を褒めた。

彼と私は、朱色に光る八坂神社まで四条通を、慣れない下駄を履いて歩いた。

八坂神社でお守りを買ひ、本殿で並んで鈴を鳴らし、お祈りをした。私は、家族の健康と交通安全、そして彼との縁がいつまでも続くようにお祈りした。

彼も長い時間、頭を下げて本殿でお祈りをしていた。

私は彼に歩きながら聞いてみた。

「亮太は、八坂さんに、どんなことお祈りしたん？」

彼は意味ありげな笑い顔を私に向けて言った。

「そら、ヒミツやし、言えんなあ」

私は彼の顔を睨むように言った。

「何やのん。ケチやなあ。言ってくれてもええやんか」

彼は私を見ながらウィンクして言った。

「お祈りしたことは、神様だけが知ってたらええねん」

私は、それもそうかなと思ったが彼を睨みつけて言った。
「変な事、神様に頼んでたら、シバクからな」

彼は、そんな私を優しい目で見ながら言った。

「お前の、そういう顔、可愛いかもしれんな・・・」

彼の言った言葉に、私は急に照れくさくなって下を見た。

彼は大声で笑いながら、私の頭を撫せてくれた。

彼の頭を撫ぜる大きな掌は、とても優しく私は感じた。

私は、こんな幸せな日々が続くことを、もう一度心の中でお祈りしていた。

月が替わって、八月の京都は異常なくらいに暑かった。

毎日、夕方に降る夕立が唯一の救いのように思えた。

路地を歩いていてもエアコンの室外機が音を立てて、アスファルトの道路も溶けそうだった。

温暖化が進むにつれて、京都の風情も少しずつ変わっていくのかなと、私は感じた。

八月が始り数日経ったとき、母から会社帰りに東山の祖母の家に来るようにと電話があった。

何やら、祖母がこの暑さで体調を崩したのか、寝込んでいるようだった。

私は会社が引けると、東山の祖母の古い京町家の格子戸をくぐった。

母は祖母の枕元に座って、横たわる祖母と話をしていた。

母は、一旦家に帰って父の夕食の準備をしてから戻ってくるので、

私に2時間ほど祖母の傍にるように、と言って家に帰った。

私は、祖母の枕元に座ってタオルを絞って祖母の額に置き換えたり、会社の話をしながら祖母の相手をしていた。

祖母は、いつもの京言葉で私に言った。

「安奈はん。あんさんは今年でいくつになるんどした？」

私は、祖母に答えた。

「今年の10月がきたら、23歳になるんよ」

祖母は、首を縦に少し振って納得し言った。

「わては、何時おらんようになるかもしれんし、あんさんに言うておくことがあるんどす」

私は、笑いながらいった。

「おばあちゃんは、まだまだ大丈夫やて。長生きしてもらわんと、私も困るわ」

4年前に、今付き合っている亮太の件で、私が泣きながら祖母の家に来たことがあった。

そのとき、祖母に話を聞いてもらって、亮太を信じて行きなさいと言われたことがある。

その時、祖母は私を凜とした言葉と、優しい言葉で励ましてくれた。

でも、その時の落ち込んだ私の心は、家に帰っても家族とも話さず、食事もしないで、

1週間ほど自分の部屋に籠って、陰鬱な気持のままで過ごしていた。そのときの父や母や、友人などに大きな心配をかけた事を、私も反省していた。

その時の話を、持ち出して祖母はしみじみと私に語った。

祖母はゆっくりと話し出した。

「まあ、お聞きやす。あんさんは4年程前、亮太のボンのことで泣かれましたやろ」

「その時、お家に帰っても泣いたはりましたわな。ずうつと部屋に籠って」

「親やら、学校のお連れやらを、随分心配させやはったことは、覚ええといやすか？」

祖母は言葉を続けた。

「安奈はんが、泣いたり落ち込んだら、周りのお人はんは、気に掛けますやろ」

「京の女子は、^{オナコ}涙を人前で見せることは、あきまへん」

「辛くても、悲しくても、じつと我慢して、明るく笑をとらなあきまへんで」

「人さまが、おらんとここで泣きなはれ。人さまに解らん様に泣きなはれ」

そして、黙って聞いている私に言葉を更に続けた。

「安奈はん。泣きとうなったら、この家の、この部屋で泣きなはれ」

「思い切り泣いたらスッキリしまっしゃろ？ほんなら、笑ってこの家から帰りなはれ」

「これから、まだまだ泣かなあかんこと、人生には仰山おまつせ。」

「わては、あんさんが自慢の孫娘やさけ、こんなキツイこと言いますけど、解るかいな？」

私が頷くのを待つて祖母は最後に言葉を締めくくった。

「この家は、わてが死んだら、安奈はんに、あげるように遺言を書いとりますさけな」

「この家は、あんさんのもんどす。遠慮せんと使いなはれ。遠慮せ

んと泣きなはれ」

「せやけど、泣き止んだら、いつものように笑ろつて、人さまに接しなあきまへん」

「わかったな。安奈はん。・・・これが、わての、あんさんへの遺言どすさかいにな」

私は祖母の、凜とした言葉を聴きながら目頭が熱くなるのを感じていた。

そして気づいたときには、熱い涙が頬を伝って流れていた。

祖母の私に対する心遣いは、祖母の厳しい戒めとともに、私の心を濡らしていった。

祖母は私に、祖母の言いつけを守るように約束をさせた。

祖母は二日後には布団を出て、いつものように庭に水を撒き玄関先を掃除した。

私が祖母を見舞いに行った時、祖母は楓と竹と躑躅と古い灯籠のある中庭を見ていた。

祖母は目を細めて夕暮れの中庭を見ながら、和服姿で本を読んでいた。

そのシャンとした姿勢の良い、和服姿の背中を眺めながら、彼女の生き様とともに苦勞の多かった人生を、私は何となく察した。

八月の第一日曜日、彼と私は四条河原町に買い物に出かけた。

私はブラウスとスカートを買い、彼はジーパンとTシャツを買った。その後、彼と私は木屋町^{ボントチョウ}辺りで夕食を摂る事にした。

木屋町の一本東側に”先斗町”^{ボントチョウ}という通りがある。

その細い路地のような通りにある、串カツなどを中心に創作料理を出してくれる店に入った。

その店は、外は普通の町家の外観だが、店内はモダンな内装でお洒落な店だった。

彼と私は、ビールで乾杯をして料理に手をつけた。

彼は、美味しそうにビールをお代わりして、串カツを頬張っていた。食事を美味しそうに食べる彼の表情は、私のお気に入りのも一つでもあった。

彼が、ビールを飲もうとしていた私に言葉を掛けた。

「来週、16日は大文字やな。どっかで一緒に見るか？」

私は、ビールを飲む手を止めて彼に言った。

「大文字って・・・亮太。京都人は”五山の送り火”と、ちゃんと言って下さい」

彼は、邪魔臭そうな顔をして私に言った。

「ええやんか。お前はすぐ、俺の言葉の揚げ足取ろうとすんねんな？」

私は、ニツコリ笑って彼に言った。

「これが、私の亮太に対する愛情表現やんか。他の人には、こんな事言いませんから」

彼は、私に一段と邪魔臭そうな顔で言った。

「ほんまにお前は、俺をおちよくってるのか、俺を好きなのか解らんやっちゃで」

私は、おどけた表情で答えた。

「私も、解らん時があんねん」

彼は、冷たいビールを飲み干して、話題を変えて言った。

「安奈の両親は、俺の事って、どない思ってるんやろ？」

私は、料理を摘みながら答えた。

「どつって、どう言うことなん？」

彼は、珍しく真剣そうな顔で私に言った。

「俺ら、まだ22歳やんか。でも、あと三年とか経ったら結婚も考えなあかんやん」

「もしも、俺らが、このまま続いて25とか26に成ったら結婚するかも知れんやん」

私は、彼の言葉に得意の揚げ足を取ってみた。

「結婚するかも知れんやんって？ まだ亮太の心の中は未決定なんやろ？」

彼は、慌てながら私の言葉に引つ掛かって言った。

「いあ、俺は決定してるけど、先のことなんか解らへんやん。安奈やって」

私は、図に乗って彼を困らせることにした。

「私は決まってるよ。浮気癖のある亮太が、結局はポイントちゃうん？」

彼は、戸惑いながらも真剣な顔で言い返した。

「アホか？ 俺は、安奈しか嫁にする気はないで。今のところは」

私は、笑いながら彼に言った。

「ほら見てみーな。今のところは・・・って言ったやん。明日は気が変わるかもね」

彼は、またまた邪魔臭そうな顔で言った。

「何か、お前と話してたらイライラするわ」

そして、彼は気を取り直してか、諦めてか笑い出した。

私も、私自身が素直じゃないなと思いながら、一緒に笑っていた。

その後も、私は目を細めて笑いながら、彼といつもの言葉遊びを繰り返していた。

彼は彼で、そんな感じの会話に乗ってくる典型的な関西人だと、私は思った。

そんなノリの人の良さが、友人を多く作る彼の素質なのかなとも思った。

彼と居て楽しいのは、彼は私の目線で向き合ってくれるからだ、私なりに感謝した。

食事を終えて、私達は鴨川の堤防を歩いた。

私達の目の前には、先斗町の料理店から鴨川の西を流れる”みそぎ川”の上に張り出された、

俗に言う”床”が夏の京都の風景を造っていた。

”床”の上では、提灯が釣られ、涼を求めて食事をするグループが賑やかに笑っていた。

彼は鴨川の石畳の上に、川を見ながら座った。

私も彼の横に座って、川端通から届く光が、流れる川面に反射するのを見ていた。

彼は、膝を抱え背中を丸くして川の流れを見つめていた。

何も言わない彼の背中が、何となく淋しく見えた。

私は彼の先程の話を思い出していった。

「ねえ、亮太。さつき、16日の”大文字”を見に行くって言うってたやん。どうするん？」

彼は膝を抱えたまま、私を見て言った。

「お前も、”送り火”って言わんと”大文字”って言うてるやんか」

私は、揚げ足を取られた気がして彼に言った。

「そんなことはどうでもええやん。行くの？行かないの？どっちなん？はつきりしーや！」

彼は、ムキになって言った。

「行くに決まってるやん。お前、死んでも予定入れるなよ」

私は、彼の言葉の揚げ足を取って言った。

「死んだら、予定は入れることが出来ませんから・・・ね！」

彼と私は、いつものように笑い、私は彼の腕を両手で抱えて肩に頭を乗せた。

彼の肩に頭を乗せる私に、彼の吸う煙草の匂いと、汗の匂いがした。私は、数日先に”大文字”の松明が描く東山の”如意ヶ岳”の方向を眺めた。

16日に”お精霊さん^{シヨライ}”を送る銀閣寺の上の山は、暗くて見えなかった。

8月12日、京都市内は、夕刻から降り出した雨が激しくアスファルトを叩いていた。

私は明日からの盆休みに備えて、会社で書類の整理と事務所の清掃

をしていた。

16日までの短い休暇だったが、この季節の京都の行事は多かった。お墓参りや、お寺の坊さんの檀家まわり、そして親戚が来たりで大変だと思った。

私が会社の掃除を終え、帰宅し食事を済ませて自分の部屋に入った。16日の五山の送り火を、亮太と見ることを約束していたので、時間の打合せをすべく携帯で連絡を取った。

彼の電話は留守電になり、彼は出なかった。

午後10時を過ぎてから、もう一度連絡を取ったが彼は出なかった。

それを、気に留めることなく風呂に入り、1時間くらい入っていた。部屋で髪を乾かしていたとき、着信を知らせるランプが点灯しているのに気づいた。

見てみると彼の携帯から3回の着信が表示されていた。

私は、髪を乾かす手を止めて彼の携帯に電話を掛けた。

コール音が鳴って、相手が出た。

それは、女性の声で彼ではなかった。

彼の携帯を女性が操作し、通話に出たので私はビックリした。

それは、彼の姉の”^{キョウコ}今日子”だった。

亮太が風呂にでも入っていて、姉の今日子が私だと解って取ってくれたものと理解した。

しかし、電話に出た今日子の声は小声で震えていた。

何か解らないが、不吉なものが電気のように私の身体を走った。

私は、今日子が泣きながら私に、必死で喋ろうとしているのが解った。

今日子は途切れ途切れに電話で言った。

「亮太が、交通事故で、今、病院やけど、ちょっと大怪我して運ばれたんや」

私は今日子の言葉を最後まで聞かず言った。

「何処の病院ですか？」

今日子は病院名を言って、半分泣きながら喋っていた。

「大丈夫やと思うんやけど、亮太の携帯が鳴ったんで、安奈やつてん、どないしよう？」

私は彼の姉が何を言っているのか解らないが、うろたえるほどの事故かと思い、

慌てて着替えをして、病院に行く事にした。

リビングの両親に、病院に行くことを告げると、父と母が一緒に行くと言った。

父と母が着替える時間に、イライラしながら車を出すのを待った。

ようやく、父が車を出し、母が乗り病院に向かった。

幸い私の家から10分ほどの救急病院だった。

私達家族が到着すると手術室の前に、亮太の母と姉が長椅子に座って泣き崩れていた。

傍には、救命手術をしたであろう医師と看護師が立ち尽くしていた。

それでも私は、姉の今日子の顔をを覗き込んで、亮太の状態を必死で尋ねた。

姉の今日子は、泣きながら首を横に降るばかりだった。

私は、傍らに立つ医師に亮太の事を問いただした。

医師も力なく、小さい声で亮太が亡くなったことを告げた。

私は、不思議と涙は出なかった。

ただ、彼の母親と姉を交互に見ながら、脚の振るえだけは自覚していた。

私の両親は、身体全体が震えている自分の娘の肩に手を置いて、無言で立っていた。

私は、これは現実なのかと疑いたくなる思いで、病院の白い壁にもたれていた。

私は、その日の夜中から朝まで、彼の自宅に運ばれた亮太の顔を眺めていた。

彼の顔は、傷一つなく、まるで眠っているようだった。
今にも、起き上がってきそうな彼の枕元には、線香の煙が漂っていた。

私は、自分でも不思議だったが、涙は出てこなかった。

朝になって、葬儀社の担当者が事務的に親戚と打ち合わせ、通夜や葬儀の日程を決めていた。

私は、人間の死を事務的に処理することが、どうして出来るのだろうと腹立たしくなった。

今夜が通夜で、明日の午後が葬儀と決まった。

私は、彼の死に実感が湧かないまま、力の入らない身体で彼の顔を眺めるだけだった。

彼は、あの集中豪雨の夕方に、会社の車で帰社する途中に大型トラックと衝突した。

ハンドルに強く胸を打った彼は、心臓を損傷して死に至った。

どちらの車が被害者なのか、加害者なのかは私にはどうでも良かった。

事実なのは、私の愛する亮太が、この世から消え去ったことだった。

葬儀は近くの葬祭会館で行われた。

葬儀が始まり、お経が流れ、白々しい葬儀社のアナウンスの中、焼香が行われた。

お経が途絶え、最後に彼の棺に花を手向ける私の目に、彼が目を開いたような気がした。

花を入れ終え、彼の眠る棺の蓋が閉じられた時、

私は突如として嘔き出してくる洪水のような涙を止められなかった。そして、大声で泣き叫びながら、彼の棺になりふり構わず縋り付いていた。

彼の葬儀が終わった後、私はタクシーで東山の祖母の家に行った。

祖母も、私の母から彼の死を聞いていたらしく、

俯きながら無言で入って来た孫娘の、目を腫らした顔を鎮痛な表情で見つめた。

そして、座布団を出して私を座らせ、何も言わずに私の肩を抱きしめ、

座卓の上に麦茶とタオルのハンカチを置いて、自分の寝室に静かに歩いて行った。

私は、座敷から見える中庭の景色が、涙で見えなくなるのを感じながら、

湧き出して止まらない涙が、畳の上に落ちていくのを他人事のように見ていた。

やがて、私は声を出して泣き出し、畳に突っ伏した身体は震えが止まらなかった。

私は、生まれて初めて、本当の意味で泣いたような気がした。

何時間がたったのだろうか？

潤んだ目を開くと、中庭はすっかり夜の中に静まり返っていた。灯りを点けていない座敷の中も、真っ暗な闇の中だった。

私は、この闇の中で不思議と安らかな心地を感じていた。

これで、亮太はもう帰っては来ないのだという、簡単な事実だけが頭に残った。

私は、座敷の蛍光灯を燈した。

暫くして、祖母が座敷に入ってくるのが解った。

祖母は、お茶を入れ替えて私の横に無言で座ってくれていた。

ここで、祖母に肩を抱かれたり、手を握られたら、また泣き出しそうな自分が居た。

祖母は、それを解ったかのように、じつと無言で座っていた。

時計の針が9時を指した頃、祖母が初めて私に声をかけた。

「家には電話してありまっさかい、今日は、此处でお泊りやす」

私は、力無く頷き祖母に初めて言葉を言った。

「おばあちゃん、ありがとう」

祖母は静かに言った。

「安奈はん。今はどんな慰めの言葉も、どんな励ましも、あんさんには聞こえまへんやろ」

「誰かに慰められるん違ごうて、あんた自身で、悲しみを片付けなあきまへん」

「辛いけど、それしかありまへん。安奈は安奈なりの遣り方で立ち直らなあかしまへん」

「わては、安奈はん、あんたを信じてまっさかい、自分なりに自分を片付けておくれやす」

祖母はそう言つて、自分の部屋に帰つていった。

私は、身体は放心状態のように力はないが、頭の中ははつきりしていると感じていた。

これだけ泣いたら、出る涙も涸れてしまったのではないかと思うくらいだった。

私は、きっと強い京都の女で、きっと立ち直つて見せると思った。立ち直らなければ、亮太に申し訳ないと思った。

16日の夜、京都の街は”五山の送り火”で賑わっていた。

私は、祖母と二人で祖母の家から鴨川の畔に出て、東山に燃え盛る松明の形を見た。

お盆に帰つて来られた”お精霊^{シヨライ}さん”が天高く、あの松明の火に乗つて来世に帰つていくのだと、私は祖母から聞かされていた。

でも、数日前に死んでしまった亮太の霊は、

この五山の送り火に乗つて、天に帰って行く事が出来たのだろうか、私は思った。

私は観光客が歓声を上げて、送り火を見ているのを聞きながら、全く違う気持で、夏の夜空を焼き上げる炎の列を見つめていた。

そして、送り火を見ながら亮太が生前に言っていた言葉を、ふと私は思い出した。

彼は16日の五山の送り火を、私と二人で見に行くからと言って、”その日は、お前、死んでも予定入れるなよ”と言っていた言葉だった。

私は彼の言葉を思い出して、何だか不思議な気持になった。

彼は送り火とともに、私に見送られて天国に帰って行きたかったの
だろうか。

私は、祇園祭の宵山に、彼が買ってくれた蝶のデザインされた”か
んざし”を挿して、

彼が天国に昇って行くのを見守っていた。

私は、消えかかる送り火を見ながら、傍に立つ祖母にポツリと言っ
た。

「私は彼のためにも、これから笑顔で生きるしな。おばあちゃん」

祖母は、少し間を空けて静かに言った。

「安奈はん。自分のために生きて、おくれやす・・・」

私は、祖母の言った当たり前の言葉が、深く心に染み込むように聞
こえた。

第3章 秋

秋深まる京都の街は、古都の風情をより強く感じる季節でもある。紅葉の色付く京都の観光地は、多くの観光客が訪れる時期で、北の大原三千院や、西の嵐山・嵯峨野の寺院なども京都の秋を求める人々で一杯になる。

私は京都に住みながら京都の観光地を、あまり訪れた事の無い自分を不思議に思った。

スギモトアンナ
”杉本安奈” 25歳。OL生活6年目の私の名前である。

私は、清んだ秋の空が広がる四条大橋の上で、駆け足で過ぎて行くとする秋を感じていた。

高校3年から付き合っ、22歳の夏に死んでしまった”亮太リョウタを思っ、

鴨川の畔から、五山の送り火を眺めた過去の夏の日を思い出していた。

あれから更に3年の年月が過ぎていったという、時の流れの残酷さと、

彼を失った傷跡を他人に隠し通して、明るい笑顔を保っている自分に不思議な感覚を覚えた。

25歳になった自分を客観的に見ると、亮太と共に無邪気に笑っていた自分の笑顔と、

今の自分の笑顔は、どこか違うように思える。

22歳までの自分は、天真爛漫で開けっ広げな笑顔が出来たのに、今の私は、何故か作り笑いをしているように感じる。

とりわけ笑った後に、笑顔の裏側に不思議な影が漂うような笑いになる。

笑顔は振りまいているが、心から笑っていないような心境になるのは何故なのだろうと思う。

それは、私が22歳の無邪気な時期を通過して、大人の女性に移行する通過点なのか、

それとも、完全に塞がれていない過去の傷跡から来る憂いの表情なのか解らなかった。

しかし、私は過去を振り返らずに生きて来たつもりだったし、これからも、自分なりに自分の人生を生きていこうと決意をしていた。

3年前の夏の”五山の送り火”を見ながら私は、祖母に呟いた。

”亮太のためにも、私は明るく生きていくから・・・”と。

その言葉を聴いた祖母は、私に慰めと戒めを込めてこう言ったのを覚えている。

”安奈はん、これからは自分の為の生きておくれやす・・・”と。

私は四条大橋の上で秋空を見上げ、そんなことを思い出しながら自分を見つめていた。

東山の峰々は、薄っすら紅葉し赤や黄色の錦を織り成していた。

鴨川の流れにも、水面に落ちた数枚の紅葉が浮いて流れていた。

京都の秋は、感傷的な心の翳りを映し出す鏡のような季節だった。

私は1年前から趣味で通っている”信楽焼き”の陶芸教室に向かって歩いていった。

私の陶芸の趣味は1年前の私の誕生日に、友人がプレゼントしてくれた焼き物から始まった。

その焼き物の、何とも言えない素朴さと温かさに触れて虜になった

私が居た。

そういう趣味に自分が凝っているのも、大人に成長した証拠かなと思っ
て見たりした。

10人ほどの小さな教室だったが、休日の趣味としての陶芸は楽し
かった。

単なる粘土から形を造り、乾燥させ、素焼きに焼き上げ、釉薬をか
け、

本焼をして出来上がる皿や花瓶は、私だけのオリジナルになる。

そんな私の作品を使って、私自身が料理や生け花をするのも楽しい
趣味だった。

私は、陶芸教室で焼きあがった自分の作品を眺め、満足そうな笑み
を浮かべていた。

1200度以上で焼き上げられた”花挿”は思った通りに出来上が
っていた。

この”花挿”を、私の祖母の誕生日のプレゼントにしようと、作っ
たのだった。

私は、その作品を色んな角度から眺め、どんな花が似合うのかイメ
ージしていた。

私の満足げな顔を見て、陶芸教室の若い先生が言葉を掛けた。

「安奈さんの作品は、プロの作品に負けないほどの仕上がりですよ」

先生の言葉に、嬉しくなっ
て私は言った。

「ありがとうございます。私も、陶芸作家に転進しようかな？」

先生は、噴出して笑いながら言った。

「まあ、そんな甘い物じゃないですがね・・・」

私も噴出しながら答えた。

「やっぱりね。そうだと思った」

先生と私は、笑いながら作品の良いところと、失敗だったところを話し合った。

陶芸教室の先生は”ムラオカ シンタロウ村岡新太郎”という28歳の陶芸家だった。

年も若かったので、私にとって先生というより陶芸を教えてくれる友人のような存在だった。

彼は東京出身で京都に住みながら、信楽焼きの作家として少しずつ評価を高める若手だった。

彼は、一見すると陶芸家のような雰囲気に見えなかった。

どちらかといえば、スポーツ選手のような体つきに、甘いマスクが印象的だった。

だから、陶芸教室に通う主婦層からは人気があった。

彼の教室の70人ほどの生徒は、80%が女性である事が、それを証明していた。

そんな主婦層が”韓流ドラマ”の男優のように彼を扱っていたが、私は、恋愛やアイドル的な対象には全く感じていなかった。

彼の事を、教室に通う熟年の主婦たちは”シンサマ新様”と、陰で呼んでいた。

彼の爽やかな身のこなしと、耳に心地よいトーンの声は好きだったが、

何処か解らないが、私の恋の対象としてのストライクゾーンからは離れていた。

私は陶芸教室が終わると、来週の祖母の誕生日にプレゼントする”

花挿”の、

化粧箱を買ったために四条河原町方面に歩いていた。

その時、私の携帯電話が鳴った。

知らない番号だったが、私は恐る恐る電話に出た。

それは、陶芸教室の講師の村岡新太郎からだった。

彼は、突然電話した非礼を謝り、私に電話を掛けた理由を話した。

私の財布が、教室に忘れていたとの事だった。

来月の月謝を払う為に出した財布を、自分の作品の出来栄に夢中になって、

机の上から、すっかり入れ忘れたようだった。

私は、陶芸教室に慌てて取りに戻った。

村岡は帰り支度をしながら笑顔で私に、忘れ物を渡した。

私が礼を言つて教室を出ようとしたとき、彼は私に声を掛けた。

コーヒーでも一緒に飲まないかと言う誘いだった。

私は、折角の彼の誘いだったので軽い気持で承諾した。

四条通に面したコーヒーショップに彼と二人で入り、私は彼にジョークを言った。

「先生。こんなツーショットを生徒の主婦たちが見たらパニックになりますよ」

彼は、とぼけた表情で答えた。

「ええ、何故ですか？」

私は、笑いながら言った。

「だって、40代以上の主婦の生徒さんは、先生の熱烈なファンですからね」

彼は、照れくさそうに言った。

「僕は、やっぱり40歳以上の女性にしか人気が無いんでしょうかね？」

私は、とりあえずフォローを入れた。

「結構、先生の笑った笑顔は”韓流スター”よりも素敵かもって、私も思いますよ」

彼は、私を見ながら言った。

「安奈さんの、ナイスフォローに、今日のところは感謝しておきます」

二人は、笑いながら運ばれてきたコーヒーを飲んだ。

私は、陶芸を指導する教室での彼のイメージと、コーヒーと一緒に飲む彼のイメージが、

何となく重ならないような気がしていた。

陶芸教室を出て、プライベートな時間に戻った彼が本物の彼なのだろうかと思っただ。

しかし、私は笑って話す彼の顔の表情を見ていて、何か引っ掛かる感覚を感じた。

無防備に笑っているのだが、何か心の底からの笑顔ではなかった。

私は、彼の表情を細かく観察していたが、その違和感の原因を突き止めた。

それは、彼が笑い終わる瞬間、彼の口元に、ふと淋しい影が浮かび上がる事だった。

私は机の上に置いた、彼の携帯電話のストラップに目を止めた。その小さなストラップには、先っぽに小さな金属のプレートが付いており、

そのプレートにはプリクラの写真が貼り付けてあった。
二人で撮ったプリクラの写真は、笑顔の彼と女性が映っているのが
見えた。

私は、軽い気持で彼に尋ねた。

「そのストラップのプリクラって、先生の彼女なんでしょう?」

彼は、一瞬何故か固まり、ストラップに目を移して答えた。

「うん。・・・だったんだけどね。過去の思い出になってしまった
んだ」

私は、彼の説明に興味が湧いて尋ねた。

「もしかして、陶芸ばかりしてて、彼女に振られちゃったん?」

彼は、少し考えてから言った。

「彼女の人生に振られたと言うのかな? まあ、振られたことには
変わらないな」

私は、意味が解らない彼の答えに、突っ込んだ。

「彼女の人生に振られたって、どういう意味なんですか?」

彼は、少し口ごもったが、ストラップを見て静かに言った。

「2年前の冬、彼女は白血病で死んじゃったんだ。だから、僕は彼
女の人生に振られたんだ」

私は、啞然として言葉を無くしてしまった。

私は、聞かないで良い事まで聞いてしまったという、自分の軽薄さ
に後悔した。

そして、彼の悲しそうなストラップを見る目に、過去の自分の悲し
みを重ね合わせていた。

彼はストラップを裏返し、私を見て淋しそうに笑った。

私は、3年前に彼氏である亮太を交通事故で亡くした傷跡が、心の奥底では癒えていないことは、自分でも知っていた。

そして、村岡の彼女である女性の病死も、村岡の心に大きな傷を作っているのを知った。

似たような境遇の彼が、笑った後で淋しい表情をする出所を知って、私の心が痛んだ。

私は、私の過去の悲しみと、村岡の過去の悲しみに不思議なシンパシーを感じた。

そのシンパシーは、同じ痛みと傷を持つ彼と私に、共通の話題を提供する事になった。

私は随分と迷ったが、彼に私自信の過去の悲しみを長い時間をかけて話す事にした。

彼は悲しそうな目をして、私の話しに相槌を打っていた。

彼も、自分の過去の彼女の運命を、私に時間をかけて話してくれた。二人の悲しい過去の物語は、お互いを知り合うには有意義な接点だった。

私は、彼に言った。

「でも先生の人生は、亡くなった彼女のものとちゃうし、先生は先生の人生やん」

「考えていても彼女は戻らへんし、先生も前に歩かないと、あかんしね」

「私は、いつも明るい笑顔で歩いていくことが、私の為やし、過去のためやと思ってる」

「あらら、年下の私が、生意気で偉そうなこと言って済みません」

彼は、私を見て言った。

「いやいや、安奈さんの言うとおりでと思うよ。頭の中では解ってるんだけどね」

「でも、安奈さんからハッキリ言われて、何か吹っ切れたような気がするな」

「誰かに言って貰わないと、だめな事って人間あるんだよね」

「いやいや、安奈さん。ありがとう。僕も、頑張ってみるよ。君のように・・・」

私は彼の言葉に、自分自身の傷跡も救われたような気がした。

彼に反論されたら、私の傷跡も再び口を開くような気がしていたからだ。

彼と私は、知らない間に共通の秘密めいた過去を共有することになった。

彼と私は、その過去の共通点によって、何かが繋がっていくような予感がした。

私は、その時、亮太を亡くした3年間を心の中で振り返ってみた。

彼と過ごした4年間の想い出は、確かに私の心の中のアルバムからは消えていなかった。

そして、私なりに祖母の言葉を理解して、3年間は笑顔で過ごしてきたと思った。

あの時の悲しみや絶望感は、祖母の家の座敷で長い間泣くことによつて癒された。

あれ以来、祖母の家の座敷で泣いたことは無かった。

その時、祖母は私に、泣きたい時は祖母の家に来て思いっきり泣くようにと言い、

人前で色んな人を心配させるような涙は、見せないようにと言った。そして祖母は、人前で常に明るく微笑み、強い自分の意思を持ち、他人に涙を見せない、

そんな素敵な京都の女性に成る様にと言ったのを、今でも心に強く焼き付けている。

11月最後の金曜日、私は仕事を終えて家路に着いた。

明日と明後日は会社も休みなので、買い物にでも行こうと考えながら歩いていた。

携帯電話が鳴り、私は携帯を開いた。

陶芸教室の村岡からの電話だった。

彼は、先週のお礼を手短に言っ、言葉を続けた。

「安奈さん。明日の土曜日から僕の作品を窯に入れる準備するんだけど、見に来ませんか？」

私は、自分の買い物と陶芸の登り窯を天秤に掛けて、登り窯を選んだ。

「はい、是非連れて行ってください。何処まで行くんですか？」

彼は、京都市内から40分ほどの都市の地名をあげた。

「亀岡市に僕の師匠が登り窯を持っているので、そこで焼こうと思います」

私は、自分の住む西京区からだとして20分の距離であることに気づいた。

翌日は、家に近い9号線沿いの喫茶店で、彼に拾ってもらうことにして電話を切った。

実際の登り窯を見たこと無かった私は、登り窯を見る事にワクワクしていた。

私は彼に会える事に、心がウキウキしている自分には、まだ気づい

ていなかった。

翌日、彼のワゴン車は、私の待つ国道9号線沿いの喫茶店に、時間通り到着した。

彼の車の助手席で、紅葉に彩られた山々を見ながら、登り窯のある山里を屈指した。

登り窯に到着するまで、彼は登り窯のある亀岡市の歴史や風土を私に説明した。

私は歴史に興味は無かったが、聞いた事のある武将や偉人の名を聞いて、

興味深い土地であることに気づいた。

700年ほど前の鎌倉時代末期に、足利尊氏が亀岡の八幡宮で挙兵して、

京都に攻め込み、建武の中興を足がかりに室町幕府を築いた事や、400年ほど前に、本能寺の織田信長を討つため亀岡の居城から、明智光秀が出陣した事など、歴史好きな彼は私に話をしてくれた。

そして、襖絵で有名な円山応挙や石門心学 of 石田梅岩も、亀岡出身であると教えた。

やがて、なだらかな山の中にある、登り窯のある大きな工房に到着した。

彼の師匠という50歳前後の陶芸家が、人のよさそうな笑顔で迎えてくれた。

早速、私は登り窯に案内され、煉瓦で作られた大きな窯に感動した。廻りには、松を割った木材が山積みされ、綺麗な工房には多くの焼き物が並んでいた。

彼と師匠は、今回窯に入れる焼き物を一つ一つチェックして見ながら、

窯に入れる段取りや工程の打合せを始めた。

私は、雑木林に囲まれた広大な工房を眺めながら、空気が澄んでいくことに気づいた。

赤や黄色に変色した落葉樹の林は、コバルトブルーの空をバックに、絵画のように鮮やかな色を織り成していた。

その師匠の工房は、登り窯やギャラリーも素敵な施設だったが、宿泊が出来る大きなログハウスも備えていた。

そのログハウスで、師匠が入れてくれたコーヒーを飲み、彼と師匠から、陶芸の醍醐味や専門的な知識を聞きながら時間を過ごした。

その時、私の目に止まったものがあつた。

彼の携帯電話が机の上に置いてあつたが、例の彼女の写真を貼つたストラップが無かつた。

彼が、あの日以降にストラップを外した事を意味していた。

私は、彼が過去を見ないで未来を見つめて歩き出した事を悟つた。

私は、帰りの車の中で彼に言つた。

「彼女のストラップ、外しちゃったんですね？」

彼は、運転しながら少しだけ私を見て言つた。

「うん。彼女の思い出の有る品は、全て処分しようと思つてね・・・」

「

私は頷いて言つた。

「私も、明日の日曜に、3年前までの思い出は箱に仕舞つてしまおうかつて思つてるんです」

彼は、暫く無言だったが、思い直したように言つた。

「お互い、古いコートは脱がないといけない時期かもしれないしね」

私は頷いて、彼の横顔を見つめた。

彼は私の視線に気づいたのか、私を見て優しく笑った。

私は、その彼の笑顔の後に現れる、淋しそうな表情を探していた。

しかし、今日の彼の笑顔は笑顔のままで、今迄の翳りは消えたように無くなっていった。

翌日の午後、私はいつものように陶芸教室に行った。

相変わらず”新様”^{シンサマ}は、主婦層の人気を独り占めしながら指導に当たっていた。

教室が終了した時、彼は私にコーヒーショップで待っているように言った。

私は、言われた通り以前に行った店でコーヒーを飲みながら彼を待った。

彼は10分後に、走ってコーヒーショップに現れた。

待たせた事を詫びながら、彼もコーヒーを注文しテーブルに座った。

彼は、今から私の予定があいているようならと言って、

清水寺の紅葉の夜間ライトアップを見に行こうと言った。

私は彼の誘いを受け、清水寺のライトアップに付き合う事を承諾したが、

東山の祖母の家に、私の焼いた信楽焼きの”花挿”を、

祖母の誕生日プレゼントとして持っていくので、長い時間は無理だと言った。

彼は了解し、短時間で帰ることを約束した。

私達は八坂神社から東大路通を南に歩き、清水道の交差点から東に折れ、

清水寺の参道を目指して歩いた。

夕刻を過ぎ、薄暗い空に清水のライトアップが遠くからも見えていた。

清水寺周辺はいつもと違う幻想的な風景に見えた。

私は、清水の急な参道を登りながら、ライトアップのスポットライトが

綺麗に京都の空に映るのを見ていて、石段に躓いてしまった。

前のめりに倒れそうだった私の腕を、彼が危うく掴んで倒れるのを止めてくれた。

彼と私は、その手と手の触れあいが切っ掛けで、自然に手を繋いでいた。

彼は、私の右手を自分の左手で握ったまま石段を登って歩き、

私は、彼に手を握られたまま、俯き加減で手を引かれて付いていった。

彼の信楽焼きを作る手は、とっても優しそうで繊細な手だと思っていたが、

私の手を握って歩く彼の手は、とっても大きくて、温かい手だと感じていた。

清水寺は煌々と1000本の紅葉がライトアップされ、

幻想的な雰囲気で行んでいた。

光を浴びた三重塔や清水の舞台が、いつもと違ったイメージで、私の目に飛び込んできた。

清水の舞台に立って紅葉を眺め、眼下に広がる夜景の中に、京都タワーの赤いライトが輝いていた。

清しい目で景色を見つめる彼の手を握ったままで、私は不思議な感覚を感じていた。

彼と一緒にいる時、私の心が何故か落ち着いている事を感じ始めていた。

私達は、清水寺を15分ほどで切り上げ、坂を下りていった。

祖母の家に行く私を気遣って、彼が早めに切り上げてくれたからだった。

急な下り坂も、彼は私の手を握ったままだった。

私も、彼と握った手が不愉快でないのは、彼の事を気に入っているのだろうと自覚した。

彼は、歩きながら私に言った。

「昨日、僕は信楽焼きの師匠を、安奈さんに会わせただろう？」

私は、頷いて答えた。

「うん。気さくな人やったね」

彼は続けて私に言った。

「今度、機会があれば安奈さんの、おばあちゃんに会いたいな」

私は、驚きながら質問した。

「ええ？何でなん？おばあちゃんは何の師匠でもないけど」

彼は、前を見ながら言った。

「僕は、こんな素敵な安奈さんを育てた、おばあちゃんに会ってみたいと思ったんだ」

「だって、安奈さんから聞いた、おばあちゃんの言葉がね」

「まわり回って僕の心に、過去を捨てて、自分の未来を作れって言ってくれた訳だし」

「間接的に、安奈さんのおばあちゃんは、僕の師匠であるわけだ」

そう言っ、彼は面白そうに笑って歩いた。

私は、私に言われた祖母の言葉を、彼にアドバイスした事で、彼の心の中の錆付いていた何かが動いて、彼の未来を変えたのだと感じた。

そして祖母の言葉が、彼と歩く切っ掛けを作ったのだと思った。

私は、彼と手を繋ぎながら歩く内に、昔からこうして歩いていたような錯覚を覚えた。

私の自覚している意識を通り越して、何かが私と彼の手を繋がせているような気がした。

彼と私の間にある、自然の成り行きのような運命は、無意識のうちに二人を動かしたように思った。

私は歩きながら彼に言った。

「ほんなら、今から祖母に会いに行きます？」

彼はビツクリして答えた。

「いいんですか？一緒に子供させてもらって」

私は、頷き彼の顔を見ながら言った。

「その代わり、祖母に叱られても知りませんよ。孫娘をたぶらかしてって言われて・・・」

彼は、珍しくムキになって言った。

「たぶらかしてなんかいませんよ。真剣に安奈さんと・・・」

そこまで言っ、言葉を止めた彼の顔が、シマッタと言う表情を見せた。

私は笑って誤魔化した、胸の何処かで心臓の音が高まるのを聞いていた。

妙に汗ばんだ彼の手が、私の手を通して彼の緊張を伝えていた。

そして私は、そのあとと思った。

それは、私の緊張した掌から出た汗だったのかも知れないと思った。

祖母の東山の家の古い格子戸を開けると、家の中から祖母が顔を出した。

祖母は、見慣れない若者と訪問した孫娘の顔を見て怪訝な表情をした。

玄関先で彼は、初対面の挨拶を丁寧にして、突然私と尋ねた非礼を詫びた。

私は、祖母の顔と彼の顔を見比べながら、心の中で楽しい気分になっていた。

祖母は、彼と私を座敷に通して、座敷机の床の間側に座布団を置き座らせた。

彼は、見たこと無いような恐縮した態度で座り、しきりに頭を下げていた。

祖母は、熱い番茶を入れてから反対側に座った。

私は、もう一度、彼と祖母を紹介し、彼が祖母に会いたいと言った経緯を説明した。

祖母は口を開いた。

「そつどすか。村岡はんも、辛いことがおましたんやなあ」

彼は、緊張しながらも答えた。

「安奈さんに指摘されて、気持の切り替えが出来たところです」

祖母は彼に言った。

「それは、安奈が、あんさんを通して、自分への戒めに言った言葉でっしゃろな」

「わても、安奈に言った事は、わてへの戒めやったと、今では思うとりまっさかいにな」

彼は頷きながら答えた。

「何れにしろ、その言葉で救われた僕には、大変有り難い言葉だったと思います」

祖母は微笑みながら言った。

「まあ、なんぼ忘れようと思っても、悲しい過去は忘れられまへんもんどすさかいにな」

「せやけど、前を見る自分が、後ろを見る自分に勝てたら、歩いて行けまっしゃろ？」

「それを自分で片付けなあきまへん。人生はそういうもんどす」

彼は、真剣な面持ちで頷きながら祖母を見ていた。

私は、祖母に叱られているように感じながら、正座をして聞いていた。

祖母と彼は、長い間、そんな話をしながら時間を過ごしていた。

私は、祖母の家に来た本来の目的を思い出し、祖母に誕生日プレゼントを渡した。

私の作った信楽焼きの”花挿”は床の間に飾られ、祖母は玄関先から花を摘んできて挿した。

祖母は、一輪の小菊と山茶花を私の”花挿”に生けて、眺めていた。祖母は、信楽焼きで作った孫娘の作品を褒め、彼も釣られて私の作品を褒めた。

私は、そろそろ祖母の家を出て帰ることにし、祖母と彼を促した。

祖母は私に一言だけ訊いた。

「安奈はん。あんさんは今年で、歳はなんぼに、ならはったんどす？」

私は、深く意味も考えずに祖母に答えた。

「この１０月で２５歳になったんよ」

そして、私の言葉には答えず、祖母は最後に彼にポツリと言った。

「村岡はん。安奈はんを、宜しゅう、お頼申します」

彼は、祖母の言葉に戸惑いながら、忙しく頭を下げて言った。

「こちらこそ、これからも宜しく、お願いします」

私は彼を見ながら、結婚の挨拶に来た男性が緊張しながら女性の家を去る光景に見えた。

私は、そんな光景を見ながら何だか可笑しくて仕方なかった。

私達二人が見えなくなるまで、祖母は綺麗な姿勢で格子戸の前に立つて見送ってくれていた。

私は、何だか祖母と過ごした時間が、一層彼との距離を縮めてくれたように感じた。

彼は深く一度だけ、大きな溜息を付いて、まっすぐ前を見て歩いていた。

私は彼と一緒に、石畳の細い路地を歩きながら、

彼と歩調を合わせている自然体の自分がある事に気づいていた。

私は、今日を境に自分の進むべき方向が、ぼんやりと路地の向こうに見えるような気がした。

第4章 冬

冬の京都は、“底冷え”という独特の言葉に表現される。

雪化粧するお寺の瓦屋根や細い路地は、そこはかこない趣があるが、雪に慣れていない京都の人は、車の交通渋滞を巻き起こす事もある。私は雪が降って音のなくなった、モノトーンの京都の町並みが好きだった。

”杉本安奈”^{スキモト アンナ} 27歳。7年勤めた会社を辞めた、私の名前だった。

11月の末に、私は短大卒業後に勤務していた会社を円満退職した。来年の2月に、25歳の秋から付き合っていた陶芸家の”村岡新太郎”^{ムラオカ シンタロウ}と結婚が決まったからだ。

私は2年間の恋愛を経て、京都で新たな彼との生活をスタートさせることになった。

彼との交際は、私が趣味で通っていた信楽焼の陶芸教室から始まった。

彼は教室の先生であつたが、同じ過去の痛みを持つ者同士として、ささやかな交流が始まり、いつの間にか将来の設計図を二人で見つめていた。

情熱的に燃え上がった恋愛ではなかったが、大人と男女の分別ある恋だった。

今年の六月に彼は、私の両親に結婚の承諾を得に家を訪れ、無言の父に手を焼きながらも、承諾を受けた。

両親の承諾を取るのに、陰で後押しをしたのが私の祖母だった。

祖母は、彼の性格や才能、そして同じ痛みがわかる若者として結婚に賛成した。

年が明ければ、彼と私は新居のマンションを探し、

これからの彼の活動の基盤となる、工房やギャラリーを数年掛けて探す予定だった。

工房で作った作品を亀岡で焼き、ギャラリーに展示して売る事が夢だった。

勿論、今迄の陶芸教室も継続するつもりで考えていた。

12月31日、彼と私は東山の祖母の家に来ていた。

正月の餅や飾り物などを母から頼まれ、彼と一緒に持って来ていた。ここ2年の歳月は、祖母の家の中に多くの信楽焼きの壺や皿や置物を増やさせていた。

それは、私の作品もさることながら彼の作品も多く含んでいた。

祖母は、ホーム炬燵を囲んで座る二人に言った。

「あんさんら、二人の新居はどないしやありますんや？」

私は、祖母に答えた。

「年明けに、手ごろなマンションを、どこかで探そうと思ってるんですよ」

祖母は、頷き言った。

「ほんなら、村岡はんの仕事場とお店は、どないしやありますのんや？」

私は、祖母に説明した。

「陶芸教室も借りてるから、いっぺんに無理やし、余裕が出来てからにしようと思ってる」

彼と私は話し合つて、ギャラリーの開店は5年計画で考えていた。陶芸教室は今迄通りに行う事で、食べるだけならやつて行ける。新居を借りることで発生する家賃は、私が再就職することによっていける。

二人で5年働いて、彼の工房とギャラリーを市内に借りることを考えていた。

祖母は、突然二人に命令するように言った。

「二人とも、ようお聞きやす。あんたらは、結婚しやはつたら、この家に住みなはれ」

「ほんなら家賃は、要らんようになりますやろ？」

「それから、この家の前半分を改築して、仕事場とお店を作りなはれ」

「それぐらいの広さは充分あるし、わてが、改築費くらいは持つてますさけ、大丈夫だす」

彼と私は、あつけに取られて祖母の顔を見ているだけだった。

確かに、この家の玄関と下座敷と納戸を店に改築して、

中座敷を仕事場にすれば立派なギャラリーと工房になる。

そして、祖母の部屋と奥座敷を残しても、2階に2部屋あるので住むには十分である。

奥に続く土間を改造すればキッチンも、新しく使いやすいものになる。

私は、彼の驚いている顔を見ながら、祖母に言った。

「おばあちゃん。私等に氣遣わんでもええしな。ここは、おばあちゃんの家やん」

祖母は私を見ながら笑顔で言った。

「わては、安奈に以前に言いましたやろ？この家は、安奈にあげる

家どす」

「わざわざ、外でしんどい目して家賃払わんでも、此処に住んだら宜しおす」

「何れは、安奈の家でっさかいな。・・・そうおしやす。」

確かに、そうすることによって、マンションを借りる家賃も、工房やギャラリーを借りる家賃も要らなくなる。

そして、この東山の町家造りは、ギャラリーにすることは面白い発想かも知れない。

また、陶芸教室に借りているビルにも歩いて5分の距離であるのは捨てがたい。

祖母は、何度も、そうするように二人に言った。

彼と私は、余りにも好都合な話だったが、祖母の事を案じて迷っていた。

夜遅くまで三人で話し合った結果、祖母の言う通りにすることで話は決まった。

祖母は、大晦日の夜遅くに私の両親に電話を掛け、その計画を無理やり両親に承諾させた。

彼と私の新生活は、東山の祖母の家を改築して、新居と工房とギャラリーを作ることになった。

そして、祖母の部屋と奥座敷はそのまま残し、祖母と同居することに決めた。

彼は、祖母の提案に深く感謝し、祖母と暮らせることを喜んでいた。

彼と私は祖母と共に、今日の大晦日と明日の元旦は、祖母の家で過ごすことにしていた。

祖母は、二人が自分の提案に同意したことが嬉しそうで上機嫌だった。

やがて、大晦日の除夜の鐘があちこちで鳴り響き、辺りは鐘の音だけの静寂に包まれた。

部屋の障子を開くと、中庭に大粒の牡丹雪がしきりに舞い落ちていた。

私は、祖母に感謝の念を込めながら、除夜の鐘を一つ一つ数えるように聞いていた。

私は彼が風呂に入っている間に、思い出深い奥座敷から中庭に落ちる雪を見ていた。

今年も、こうして一年が暮れて行くんだなと、感慨深く座敷を見渡した。

それとなく見回した部屋の中で、視線の先にキラリと光る反射物を見つけた。

それは、座敷に置いてある茶箆笥の棚の上で輝いていた。

私は光る物を手にとって、懐かしい眼差しで、じっと見つめていた。それは、棒の先に止まって羽を広げている蝶を模った”かんざし”だった。

忘れもしない、5年前の祇園祭で亮太に貰ったものだった。その”かんざし”を髪に挿して、五山の送り火に彼を見送った記憶は消せはしない。

祖母の家の奥座敷で、眠っていた亮太の”かんざし”は、

私に何かを語りかけるために、光っていたのだと私は思った。

”かんざし”を両手の上に置いて、長い時間眺めている自分を別の自分が見ていた。

5年前に亡くなった亮太は、今の私を天国から見て、どう思っているのだろうと私は思った。

奥座敷に入ってくる祖母の声がした。

「安奈はん。年越しのお蕎麦でも作ったらどうどすいな？・・・」

じつと”かんざし”見て、黙って座っている私を見下ろして、祖母が言った。

「あら、それは・・・遠い夏の日から、飛んできた綺麗な蝶どすなあ」

私は、祖母を見上げて言った。

「キラツと光ったんで、何やろって思ったら、これやったわ・・・」

祖母は暫く立ったままで、そっと私に言った。

「亮太はんが遠いところから、蝶になって、あんたに、お祝い言いに来はったんどっしゃるな」

私は祖母の言葉を聞きながら、そうかもしれないと思った。

そういうことは信じない私だったが、そう思ったほうが素直な感覚だと思った。

もし本当に亮太が、私に”おめでとう”と言ってくれているなら、亮太は、どんな微笑で、どんな声で、どんな目で言っているのだろうと思った。

私は、蝶の”かんざし”を、暫く見つめてから、静かに言った。

「亮太、お祝い言いに来てくれたんか？ 私、幸せになるしな。安心してな」

「ほんなら、もう、帰ってええんやで・・・亮太、有難うな。気付いて帰りや・・・」

私は、そう言つて祖母に亮太の残した”かんざし”を渡した。

祖母は、”かんざし”を小さな桐の箱に入れて水引で結んだ。

祖母は、桐の箱を初詣に行く八坂神社に、お返しするようにと小声

で私に言った。

私は頷いて、桐の箱を手に取り中庭に落ちてくる雪を見上げていた。私の見つめる中庭の暗い空間を、綺麗に光る七色の蝶が、金色の粉を撒き散らしながら、

天を目指して飛んでいく姿が、私の瞼に見えたような気がした。

その蝶は、ゆらゆらと頼りない軌跡を残しながら、

名残惜しそうに一度だけ舞い戻って羽を羽ばたかせ、そして優雅に飛び去って行った。

年が明けて、結婚式の日が近づく慌しさと共に、

祖母の家も、増改築の業者の出入りで慌しく賑やかだった。

祖母の事を考えて、出来る限りバリアフリーに補修し、

新しいフローリングや、ホルマリンの出ない和紙のクロスなどが張られた。

ギャラリーや工房も、京都で伐採された地元の杉材や檜材で仕上げられ、

北山杉の化粧柱も、アクセントに数本使われた。

シックな木調のギャラリーに、明るい先端の照明器具が配置され、外観は以前の町家の風情を残し、内観はモダンな建物となった。

二月の末に彼と私は、ささやかな挙式を挙げて、祖母の家で新婚生活をスタートさせた。

彼は、従来の陶芸教室を存続させながら、精力的にギャラリーの充実を図った。

自分の作品以外にも、自分の師匠の作品や友人の作品も展示するスペースを作り、

彼の友人の西陣織の作家の作品も並べられた。

噂を聞いてやってきた、清水焼の作家や京都の版画家などの作品も並べられた。

京都の伝統を継承する作家や、京都で活動する色んな芸術家の作品を、

このギャラリーに並べる事によって、相乗効果も期待できると思った。

単なる彼の信楽焼きだけのギャラリーでは無くなった。

彼と私は、このギャラリーに色んな人たちが集まり、語り合える空間として、

そして情報交換と交流できる空間になれば、素晴らしい事だと思っていた。

インターネットのホームページも作成し、京都へ来る観光客の人々や、

京都に住む若者達にギャラリーの存在を伝える手筈も取った。

私は彼に、ギャラリーの片隅に小さなスペースを貰って、自分で焼いた陶器の小物を並べる事にした。

その小さなスペースは、女性が好みそうな小物やアクセサリーを中心に並べた。

その小物の評判が良く、焼いても焼いても追いつかないほどだった。

私は、彼が陶芸教室に行っている間は、ギャラリーを見守り、彼がギャラリーに居る時は、家事をしたり祖母と話をしたりして過ごした。

そして、その間を縫って自分の小物の作品を工房で作っていった。箸置、携帯ストラップ、陶器のワイングラス、ブローチ・ペンダントなども作った。

私の作った小物には共通のデザインが施されていた。

それは、全ての作品に”蝶”がデザインされているか、作品そのものが蝶の形をしていた。

その蝶は、時にはシックなデザインだったり、時には七色に輝いていたりした。

私の作品の”蝶”は、優雅な羽を広げ休んでいたりと、華やかに作品の中を舞っていた。

私は、ギャラリーで観光客と話をする彼が、可笑しくてたまらなかった。

何故なら、京都古来の伝統や京都のアイデンティティーを語る彼の言葉は、

京都弁ではなく、生まれ育った東京の標準語だったからだ。

彼の言葉は標準語だったが、心は京都の住人より京都らしいのかもしれないなかった。

水を得た魚のように創作に没頭し、京都や陶器を熱心に語る彼は、とても良い顔と眼差しをしていると私は思った。

そんな、彼の横顔を見ながら一日が過ぎて行く事が、私にはとても幸せだった。

二月最後の日、午後から京都の街に最後の雪がちらついた。

彼は、ギャラリーに足を運んでくれた客と、信楽焼きの話をしていった。

私は底冷えのする奥座敷から、火鉢に手をかざしている祖母と番茶を飲みながら、

満開に咲いている中庭の梅の花を眺めていた。

祖母は、火鉢の炭を見ながら言った。

「安奈はん。あの時の”蝶”は、あんさんの心に、まだ飛んどるんどすか？」

私は、梅の花から目を離さずに祖母に答えた。

「あの”蝶”は、あの晩に天に帰って行っただし、私の心には居てへんよ」

祖母は、私の横顔を見て言った。

「そつどすか・・・それやったら、良いんどす」

祖母は、私の顔を見つめて微笑んでいた。

私は祖母に微笑を返し、梅の花に目を戻した。

梅の花は、誰のためにでは無く、自分のために咲き誇っているのだと私は思った。

私も誰のためでも無く、私のために生きなければと改めて強く心に思った。

そして私は、さっきの祖母の言葉を心の中で自分自身に確認してみた。

今、私の作品の中に飛んでいる”蝶”は、あの晩の蝶ではないと確信した。

彼と私が新しい生活をスタートさせた冬の終わりに、

春の予感を感じた”蝶”が、何処からか私の心に舞い降りて来たのだと思った。

私は、中庭の梅の花を見ながら祖母に言った。

「おばあちゃん。中庭の梅も満開やし、あした北野の天神さんにお参り行こか？」

祖母はニッコリ微笑んで頷いた。

エピローグ

こうして、10年間の私の恋の物語は終わりました。
いえ、きつと今でも恋は続いているのだと思います。

人間である以上、色んな恋に出逢う事があります。

そして、色んな恋を経験して人間は成長して行くものだと思います。

人間は傷ついた分だけ、他人に優しくなれると言います。

そして、流した涙の数だけ強くなれるとも言います。

本当にそうなのかどうかは、今の私には分かりません。

私の祖母のように、長い生涯をかけて分かる事なのかも知れませんが。

私は祖母の言った言葉の中で、

” 自分のために、生きておくれやす・・・ ”

という言葉をもう一度考えています。

自分のために生きると言うことは、多くの意味を含んでいるのだと思います。

私は、京都に生まれて、京都で育ち、京都で生きています。

しかし、この物語を私が話しながら、おかしな話ですが、

京都の観光地は京都以外の人のほうが、詳しいのかもしれない思
ってしまいました。

確かに京都の街に住んでいる私なのですが、ふと、そんな事を思
いました。

京都の四季は、私にとって優しい笑顔で迎えてくれたり、

無情なほど厳しい現実を、突きつけてくれたり、

感傷的な心を温かく包んでくれたり、

そして、生きる為の色んなヒントを与えてくれたりします。

そんな京都に暮らすのは、とても素敵な事だと感じる時があります。これからも、いつも明るい笑顔で、涙を見せずに歩いて行こうと思います。

スキモト アンナ

ムラオカ アンナ

”杉本安奈”から”村岡安奈”に変わった私ですが、

主人と祖母を見習いながら、もっと素敵な人間になれたら良いなと思います。

< 完 >

エピソード（後書き）

最後まで有難うございました。

何か、読まれた方の胸に伝わればいいのですが……。やっぱり、文章って難しいと思いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4682g/>

京都の四季

2010年10月13日09時00分発行